

新田開発と番割観音、百曲街道

歴史文化の香るまち熱田。熱田神宮を中心とする熱田台地上のみばかりでなく、堀川を挟んだ区の西側地域にも多くの物語があります。

今回は、熱田区から中川区、港区に至る「熱田新田」開発の歴史と、それに伴う「番割（ばんわり）」町名や観音堂と観音巡り、「百曲（ひゃくまがり）街道」などについてご紹介します。

江戸時代、経済の根幹は農業（米）であり、各藩で耕地を増やすことにより増収が図られました。「熟田新田」とは、年貢米の増収のために尾張藩が実施した最大の新田開発で、初代尾張藩主徳川義直の命により、正保4（1647）年から5年の歳月をかけて開拓され、「御新田」と呼ばれていました。

熱田の堀川筋から庄内川に至る間で、現在の熱田区西部～中川区、港区にまたがる東西約4キロメートルの海岸線（現在の国道一号辺り）が、南北約1キロメートル（現在の東海通辺りまで）にわたって埋め立てられました。その結果、約4,000ヘクタールの農地が誕生し、4,000石くらいが増えたといわれています。

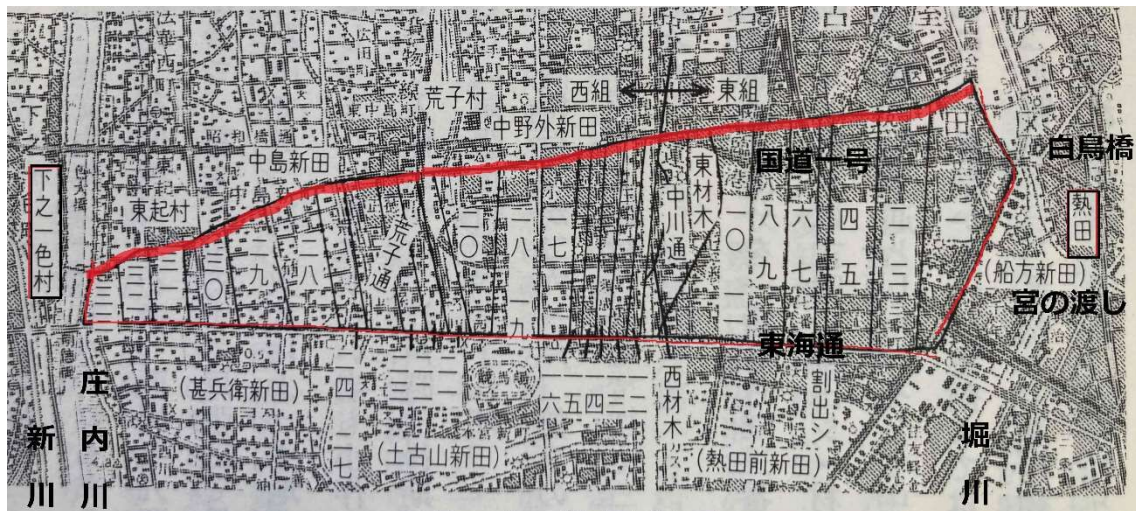
<一石は約180ℓ、米約140～150kg。>



(熱田区誌)

そして、「熱田新田」を東（熱田区側）から西に向かって、順に1番～33番に区割りし「番割」と呼び、それぞれに干拓の安全と守護を願って、西国三十三ヵ所にちなんで観音堂が祀られました。現在、熱田区一番～六番・八番、港区七番・九番、中川区十番・十一番の町名が残っています。＜観音は、救いを求める人々を救済する菩薩。農耕や水産、現生利益の仏として庶民信仰の中心。＞

観音堂は今も地域の方々によって大切に守り継がれており、毎月第3日曜日に、1番～33番の観音堂、約10キロメートルを巡拝して歩く「観音巡り」の風習が残っています。（まとめて祀られているところもあります。熱田区内には1番から9番までの番割観音があります。）



（新修名古屋市史 第3巻）

「百曲街道」は、熱田新田北側の干拓堤防上に自然にできた道で、くねくねと曲がっていたことからそう呼ばれるようになりました。

当時、下之一色方面まで結ばれており、熱田湊（熱田魚市場や宮の渡し）と結んでいたといわれています。さらに名古屋の城下町と熱田を結ぶ幹線道路であった本町通とも繋ぎ、城下町と西南部を結ぶ産業道路の役割を果たしました。区画整理等で姿を変えていますが、今もところどころにその面影を見ることができます。

それでは1番から順に歩いてみます。（観音堂は概ね百曲街道沿いにあります。）

まず熱田区内、堀川に架かる白鳥橋の西、国道一号沿いにある1番観音堂です。交通安全祈願のお地藏様があります。



1番
（熱田区
一番1）



国道一号を少し西に進んだところにある2番・3番観音です。隣の熱田社には、熱田区の木「クロガネモチ」の巨木があります。



2番・3番

(熱田区二番1)

(お寺(慈教寺)の中にあるので
通常拝観できません。)



少し北に行くと、百曲街道(跡)に出会います。百曲街道を西に進んだところにある4番・5番観音堂です。こちらにあるお地藏様は重軽(おもかる)地藏と伝えられ、軽く抱えられたら願い事がかなうといわれています。



4番・5番

(熱田区四番1)



西に進んで、江川線沿い、高速道路と新幹線の高架下近くにある6番・7番観音堂です。



6番・7番

(熱田区六番1)



さらに西に進んだところにある8番・9番観音堂です。ここには、熱田と名古屋の分岐点を表す道標があり、百曲街道の面影が残っています。(道標は、「あつた」と「なごや」の方向が逆になっており、少し北の分岐点から移設されたといわれています。)



8番・9番

(熱田区八番1)



熱田区内にある観音堂はここまでですが、さらに足を延ばしてみます。東臨港線下をくぐり、中川区、港区へと進みます。



10番・11番観音堂です。



10番・
11番
(中川区
十番町1)



中川運河(昭和橋)を渡って、南に進み、南郊運河と小碓運河の堀留を越えた東海通近く、12番・13番観音堂です。建物の中にお堂があり間近に見ることができます。



12番・13番
(港区須成町3)



北に戻ると、14番・15番・16番観音があります。



14番・15番・16番

(中川区松年町2)

(お寺(天年寺)の中にあるので
通常拝観できません。)

西に進み、17番観音堂です。



17番

(中川区昭明町3)

小碓通を越えて西に進み、18番・19番観音堂です。



18番・19番

(港区明徳町1)

西に進み、20番観音堂です。



20番

(港区正徳町1)

あおなみ線（西臨港線）を越えて西に進みます。21番・22番・23番観音堂です。



21番・22番・23番

(港区正徳町4)

荒子川（荒子橋）を越えると熱田新田の干拓工事に当たった豪農、鬼頭景義が開いたお寺、空雲寺があります。鬼頭景義は私財を投げうって多くの新田開発、用水事業に取り組み、生涯で約30の新田を開発し、その石高は23,000石に及びます。



少し南に進むと、25番観音堂があります。

（24番と順番が逆になっています。）



25番

（港区小碓1）

さらに西に進んだところにある26番・27番・28番観音堂です。

ここで、地域の方にお声を掛けていただきました。観音堂の中を見せていただき、お話をお聞きすることができました。

“番割観音は地域で大切にお守りしている。観音巡りは、昔と比べて数は少なくなったものの今でも巡拝される方々がみえ、その際、お茶とお菓子でおもてなしをさせていただく。”とのことでした。



26番・
27番・
28番
（港区
小碓1）



西に進み、24番観音堂（左側、右は神楽保存庫）です。25～28番より西にあります。



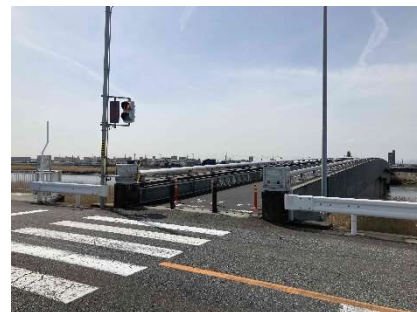
24番
(港区小碓4)

稲葉地井筋（庄内用水支流）を超えて、29番・30番・31番・32番観音堂です。



29番・30番・31番・32番
(港区明正1)

さらに西に進むと庄内川の堤防に突き当たります。百曲街道はここまでとなります。
庄内川を正徳橋（人道橋）で渡り、下之一色に入ります。



33番（みよどめ）観音堂です。（干拓工事最後の堤防の締切りをみよどめ（滞止め）といいます。）もともと港区当知町にありましたが、庄内川の川筋が変わった際に新川堤防沿いのこの場所に移されたといわれています。



33番（みよどめ）観音
(中川区下之一色町)

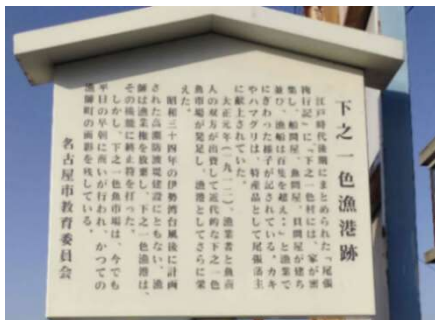
「番割観音巡り」は以上で終了となります。近くには下之一色の漁港跡があります。

庄内川河口、新川と合流する三角地帯に位置する下之一色は、かつて熱田とともにこの地域有数の漁師町でした。

大正元（１９１２）年に魚市場が開かれ、昭和３４（１９５９）年の伊勢湾台風を機に漁業は終了しましたが、最近まで朝市が続いていました。

漁師町独特の閑所（かんしょ）と呼ばれる狭い路地など、郷愁を誘う街並みが今も残っています。

<写真はかつての魚市場の様子です。令和３（２０２１）年３月に営業を終了し、現在は取り壊されています。>



今回は、新田開発に携わった昔の人々の偉業を偲ぶまち歩きとなりました。

熱田区には、あまり知られていない資産や物語がまだまだたくさんあります。そんな熱田の魅力を発掘、発信できたらと思います。

<記載中不十分な点をご容赦ご教示ください。（少し以前の記述があります。コロナ禍、番割観音巡りが行われているか等、詳細は不明です。）>